

「わが父」 伊藤喜三郎

伊藤喜三郎 建築
研究所社長

伊藤 一章

はじめに

最初にお話ししたいのは、自分自身の事です。私は今五十二歳になりますが、私はこの七、八年くらい前から漠然と死という事について考えるようになりました。考えるというよりも意識をするようになったと言った方が正しいかと思えます。これは多分、我々の事務所が病院の設計をやっていることに少し関わりがあるかもしれません。やはり建築を通して人の生死を考えると機会としては多いものですから、多分そういうことが原因だったと思います。そして

その頃に自分の身体を献体することを考えつきまして、自分が万が一の時には、目とか腎臓とか、何か人に差し上げられるものであれば差し上げたいと思い、各々の協会に入らせて頂いたりしました。また、尊厳死協会がその頃出来まして、入会しました。それから送って下さるパンフレット等を見て、色々な方の死に対する考え方について少しずつ知るようになりました。

この考え方というのは、自分の年齢のせいとか職業のせいとか色々なことが複合していたかと思えます。父も当時七十五を過ぎ、その頃ま

で大変元気だったのが、急激にその頃を境に弱って参りまして、私の死に対する考え方、或いは意識は父の年齢とは関係ありませんでしたが、父の老齢化に伴い自分の死の意識が少しずつリンクしてきた事を思い出します。

父の最期

だんだん歳をとり、それまで元気だった父が急激に弱くなっていったのは、リュウマチと肺気腫のせいだったようです。だんだん自分の体の自由が利かなくなつて、毎日の生活が楽しくなくなつてきて、時々、自分は人生があまり面白くなくなつたら自殺をしたいと漏らすようになりまして、やれピストルがないかなとか薬がないかなというようなことを時々呟くわけです。母にそんな事を言つて困らせたりしていません。母にとって自分の配偶者にそういう事を言われるということは、大変辛い気持ちだったと

思います。私は、私なりに父の身になってそれまでの父の生き様を考えてみると、父の自殺をしたいという事に対して同意をするという意味ではありませんが、そのように思うことに関しては何となく分かるような気がして、父ともそんな話しをした事を記憶しています。

父にはゴルフと絵画というのが人生の最大の喜びで、二つの目的のために毎日生きているというようなどころがありましたから、リュウマチで肺気腫でということだと、ゴルフも出来ない、絵も描けない。自分の人生の楽しいことを二つ共奪われてしまったわけで、そのような考えを持つことも無理はないと思わされました。

結局、肺気腫で呼吸も困難ですし、手も痛くて動けないので、偶に調子がいい時にちよつと筆を持つて絵を描いたりということもありましたが、大体は日がな一日椅子に座つてボーとし



講演中に

アトリエにて



て絵を眺めていて、その時間がどんどん長くなっていききました。それは、時間が経つてみますと、自殺をしたいと言っていた頃は逆に言うくと、まだそういう事を考える、或いはしたいというエネルギーを持っていたように思います。最後の方になると、そういう事を考えるエネルギーすら無くなって参りました。亡くなりましたのが昨年三月ですが、一昨年の末くらいから時々意識が混濁するというか、あらぬ事を言ったり、辻褃の合わない事を言ったりするようになります、その頃の母は、そういうケアに神経を磨り減らしていたと思います。

いよいよ体の調子が非常に悪くなったものから、入院をしました。その頃、どんどん意識も混濁してきたので、家族の者が父の気持が和むようにという配慮で、有名な画家の描いた絵のカレンダーを持って行きました。誰が描いた絵かということも分からなくなってきました。

て、絵を捲つてやりますと、何だかつまらなそうな顔をしていましたが、ピカソの絵のときだけ「この絵は強いね」と言いました。勿論好き好きがありますが、ピカソのキューブの時代が終わった頃の絵でしたが、それで私もピカソの絵をもう一度見直したくらいで、人間の意識が遠のいていこうとしている最中にも強い絵という事を認識させるというのは、普段我々が見慣れているものではない何か違うものを取り出して見ているのかなと思つて、ちよつとギリとさせられた記憶があります。

父の亡くなる大分前に、或る人にゴルフを誘われていましたが、その頃父もあまり具合が良くなかったのでお断りしていました。その後もう一度同じ方から誘われた時、小康状態のように思われたので、三月二日、沖縄へゴルフに行きました。ところが三日の朝、ホテルからゴルフ場に着くと、どうも具合が悪いようだから早

く帰つて来た方が良いと連絡が入りました。慌ててゴルフ場から直接飛行場に行き、運良くキヤンセル待ちの飛行機に乗ることができて、十二時ちょっと前に日大の駿河台病院に着きました。昼まで持たないのではないかと言うことでしたが、幸いに、俗に言う死に目には会えたわけです。

父は、楽しくそして劇的に人生をエンジョイして、八十二歳にあと数ヶ月というところで静かに亡くなりました。病院の先生方は、肺に管を通して酸素を送ればもっと持つとか色々な事を言つて下さいましたが、昔は注射針を見るだけで気絶しそうだった父のことを思い返すと、とてもそんなことをする気がしませんでした。父にとつても楽しいことはもう無い、もう十分遊んだのだからという確信めいたものが我々にはありましたので、父にはもう触らないで頂いて結構ですと言ひ、静かに眠ってもらいました。

夕方の五時くらいだったでしょうか、我々家族と当社の石嶋副社長と、父と一番長く付き合つて下さった二、三の方が幸い居て下さつて、父の最期を看取りました。

画家志望から建築家に

父は大正三年に昭和通りの宝町で生まれたと聞いています。祖父が小さな鉄鋼所のようなものをやつていて、シャッターなんか作つていたようです。当時昭和通りは既にあつて、十六間道路とかいう名前だったようですが、夕方になると赤い切れを投げてはコウモリをそれに捕まらせて遊んでいたという非常に穏やかなのんびりした頃だったようです。中学になりますと、いよいよ父の一生の楽しみとなる絵を知ることになります。油絵を覚え始めて、祖父の工場の一隅に小さいアトリエを作ってもらつて、そこで親友とオペラ『ラ・ボエーム』の様な芸術家

仲間と芸術論を戦わせたり、中学生のくせしてモデルさんと呼んで友達と絵を描いたり。そこに爺さんが、どういう気持か分かりませんが、お茶を入れて「何やっているんだ」と見に来ていたそうです。

その親友と、自分たち二人は絵描きになろうと堅い約束をそのアトリエで交わしたそうですが、結果的に父は途中で挫折することになります。自分では色光派と呼んでいたようですが、色を光のスペクトルに分けて、そのスペクトルで物や人を描くという一派を自分で成したつもりだったそうです。上野の展覧会のもぎりのおばさんが「あんた貧乏なのに絵を描いて偉いわねえ」ということで入場切符をくれ、今度はその切符を売って、そのお金でまた美術館へ戻ってカレーライスを食べるといふ生活をしていて、それで、本当にボヘミアンのような楽しい生活をしていたようです。

今回つくづく思ったのですが、こういう機会を与えて頂いたことによって、自分の父親の生涯をトレースしたわけで、実に珍しい体験をしました。今日ここにお集まりの皆様も自分の父親がどういう風に生まれて、いつ何をして、その時どういう思いだったかということを詳しく聞くチャンスはおありだったかもしれません。私はそれを五十二になって初めてさせて頂き、父のお友達だった方何人かにお目にかかって話をお聞きする機会に恵まれました。中には、思い出話をなさって涙ぐまれる方もいらっしゃったりして、本当に皆さんに感謝をしています。父のことをもう一遍掘り起こしてトレースさせて頂いた事は、親父に対して「南無阿弥陀仏」と祈っているか親孝行させてもらっているような独特のいい気持ちになりました。

父が旧制中学後半の頃、祖父が事業に失敗し会社が倒産しました。ですから、楽しく絵を描



きながら暮らしていくことができなくなり、絵にあまり遠くなくして食べる職業は一体何だ、建築だ、という荒っぽい加減な決断をしたらしくて、急遽大いに勉強して日大の理工学部に入ることに成功しました。漸く大学に入れたわけですが、大変厳しい学生時代を過ごしたようです。しかしながら同時に、その時に同窓の友達として内田祥文さんと知り合い、その内田さんが、画家になろうと思って建築家になった父に、本当に建築を一生懸命やろうと思わせるインパクトを与えることになります。同時に、大学におられた小野薫先生との出会いが父には大きな事だったようです。小野薫先生は元東大の生産技術研究所におられて日大に來られた方で、内田祥三さん、佐野力さん、岸田さん等多くの立派な建築家の方々が日本の建築界におられて、小野薫先生からそういう方々とだんだん父のネットワークが出来て、そういう方々から

何等かの薫陶を受けたことも父にとって非常に大きな利益だったと聞いています。

とにかく父によれば、中学ではいい加減な生活をしていただけでも、大学では大変勉強して、優等で卒業したということです。卒業と同時に小野先生の推薦を得て、東大の営繕課に入りました。営繕課で二年くらい働いて、その後日立製作所に入りました。当時は戦時中ですから防空壕の設計などをしていました。それから兵隊にとられて千葉の鉄道隊に入り、幸運にも戦地に行くことなく兵役を終えました。

事務所を設立

終戦後は大成建設（当時、大倉土木）に入れて頂く事になりました。それも小野先生のいろいろなお引き合わせもあったりして、大変多くのいい友人に恵まれて、終戦後の苦しい生活の中でも充実した時代を送ったと聞いています。約

六年半くらい大成建設に勤め、昭和二十七年に中野の自宅に何人か仕事をしてくれる仲間が集まり事務所を設立しました。次の年の二十八年には四ツ谷の交差点のすぐ側で事務所を始めましたが、実際はそれほど仕事はなく、仕事をしたいけれども設計を出して下さるお客さんもないということに厳しい状態が続いていたようです。しかし、小野先生の紹介でちゃんと設計

してくればという条件で、当時大久保にありました社会保険中央病院の仕事を保険庁から頂戴しました。この仕事は父にとって初めての病院の設計でしたが、その病院を設計したことがうちの現在に至る歴史の基礎を作りました。余談ですが、五、六年前、父の第一作となった社会保険中央病院の移転新築の設計をやらせて頂き感無量でした。

その後、事務所は飯田橋駅の四ツ谷寄り出口の坂を下りたところの喫茶店の上、三十二年に

銀座の裏にビルの設計をしてそこに入った頃は大変忙しくもあり、毎年年末になると入院を繰り返していました。三十七年に銀座七丁目の表通りに引越して、三十八年に仙台に支店をつくりました。そのあたりは順調に推移致しました。四十六年に紀尾井町の文芸春秋ビルに引越して現在に至っています。

昭和四十六年には、記念すべき広尾の日赤医療センターの仕事を受注しました。この仕事は事務所始まって以来の規模で、こんなに大きな仕事は二度とやることはないだろうと、父にとって最大の感激を持ってやった仕事です。

有名だったゴルフ

文春ビルに引越した頃までは仕事が大変忙しくて、絵を描く時間も殆どありませんでしたが、その後は会社もだいぶ安定し、少し絵を描ける時間も出てきました。同時にゴルフにも相

当気が入ってきて、以前から岸田秀人先生にゴルフの手ほどきを得たりして、当時の梓設計社長の清田先生とか現代事務所の北代先生とか、そういうお仲間とご一緒にゴルフをやっていた。父が有名だったのは決して一ラウンドでは終わらない事です。とにかく一ラウンドハーフはやって、調子が乗ると二ラウンドでも回りたい。あと三ホール回ろうとか四ホール回ろうとか言われて、とにかく父とやった人は辟易していたのを覚えています。

ある時、ものすごく暑いインドでゴルフをやるチャンスがありました。これは私が一緒だったのではなくて人から聞いた話なのですが、一ラウンド終わった後、父が「もうハーフ行こうか」と言ったらいいんです。そしたらインド人のキャディが青くなって、「いや、もう暑くてかなわないから勸弁してくれ」と言ったんですね。父は非常に痩せていて、暑いのはいくら暑くて

も大丈夫、寒いのはちよつと寒いと全然駄目という人で、「インドへ行くと体の調子が良くていいなあ」と言つて、本当にインドへ行くのを喜んでいて、僕の記憶でも十何回行ったと思います。それからパキスタンも随分と行きました。自分の絵のために仏跡とか、いろんな面白い興味の対象があつたことが最大の理由ですけれども、暑さが父の体に合つたということも一つの大きな原因だつたと思います。

父と同じ建築家の道へ

父は戦時中三十二歳で、父の美の基準にびつたり合つた母と結婚し、私は昭和二十年二月に生まれました。父は仕事の事、事務所内部の事など色々苦労していましたが、何も知らずに僕は大きくなりました。のんびりした僕を、本当に優しく見守つてか見放してか知りませんが、親身になつて「お前は建築家にならなくてもい

いよ、何か他の商売だつて全然構わないから」と言いながら、いろんな道を僕と一緒に探してくれました。結果的に僕は自分の利益になるのではないかということで、父と同じ道を選択して父と同じ日大の理工学部に入りました。何とか無事に大学を卒業し、会社に一年ちよつと勤めた後、イタリアに行くことにしました。イタリアに一年半くらいいましたが、その間に父と母で僕を訪ねて来てくれました。

父の最も重要な作品は、昭和五十二年に設計した神戸の中央病院です。うちの事務所としては初めて建築学会賞をいただき、更にBCS賞も頂戴した記念すべき作品となりました。

昭和五十六年には、当社にとってODAで初めて「日中友好病院」という海外の仕事を受注します。一〇〇〇床という大規模なプロジェクトでした。このプロジェクトを通じて中国の方々と多く知り合い、このネットワークの関係

から六十二年に中国の民間工事の仕事を受注する事になります。これは北京市西直門の国際サービスセンターという仕事で、この仕事の結果的に我々の事務所の危機を招くことになりました。この仕事は中国の方々との方の考え方の違い、或いは業務範囲の違い、色々な認識の食い違いがありました。我々はそれまでODAの経験しかなく、ODAですと日本の設計慣習に従がつてやれば良いのですが、この時は直接の契約だったために我々は首に鎖をつけられた状態で仕事をすることになってしまいました。なぜそういう仕事をやるようになったかという点、父は超高層建築をやりたいというのが悲願で、この国際サービスセンターの仕事は三十何万平方メートルくらい大きなコンプレックスで、その中に超高層が何本か建つというプロジェクトでした。父は、何とかしてこれをやりたいと、反対する僕とだいたいぶ対立しました。最後に父が中

国に行つて僕のところへ電話してきて、「今、隣の契約会場に新聞社の人達がたくさん集まっている。お前がどうしても嫌だと言ふのなら俺はこれで帰るけれども、その実情を理解してほしい」と言いました。僕もそこまで父に言われたら拒絶することも出来ず、「分かりました。それではそうして下さい」ということで契約をしたのですが、実はこれは大変な泥沼の始まりでして、それから僕自身にとって初めて塗炭の苦しみというものを味わうことになりました。

とにかく行けども行けども泥沼のようなプロジェクトで、中国に行く度に自分の顔が歪んでくるのが分かりました。本当に辛い時は涙が出るようになるくらい辛くて大変でした。しかし、それまで父のものとして見ていた事務所を、自分のものとして感じるようになりまして。自分も必死になって何とかこれ乗り越えようと思ひますし、事務所の先輩達も一緒になって、頑張

つてくれました。最初のうちは僕がこの仕事に反対していたこともあって、父がその仕事をやって僕が国内の仕事をやるといふことで仕事を分けていました。しかし、どんどん仕事が大変になり父が苦しんでいることが分かってきました。苦しんでいる父を遠くで見たいと思ひなくなり、これでは子供として立つ瀬がないと思ひ、父にある日「僕が代わつて、あとは僕の信ずるままにやらせてほしい。とにかく親父はこれをやつていたら死んじゃうから、代わろうよ」と言つて、バトンタッチしました。その後一年か一年半くらいで、一生懸命やってくれる仲間の人達と、この仕事を何とか無事に乗り切ることができました。この建物は結果的には建ちませんでした。アパートが一つだけ建つて、今は朽ち果てています。当時その社長だった人は、大変偉い方の息子さんでしたが、今は刑務所です。

その仕事は結果的に何とか乗り越えたため

に、僕は生まれて初めて厳しい仕事を乗り越えることを覚え、一緒に仲間として仕事をやってくれる生涯の友人をそこで見出したと思っております。それは僕にとっては苦しみというよりも結果的には素晴らしいものを授けてくれたわけです。しかし、父はそれですっかりエネルギーと自信を無くしてしまいました、また僕が何とかそれを上手く乗り切ったことから、そろそろ僕に社長をやらせようと思ったようです。それである日「お前、社長になれよ」と言われ、いよいよ社長を就任することになりました。父はその時僕に、とにかく社長をやる以上は「こんな会社は守りに入っては駄目だよ、とにかく攻めて攻めて攻めていかなければ駄目だよ。俺はお前に譲るから、好きなようにやってみるよ。一切口を出さないから」と言いました。その結果、本当にそれっきり僕にああせいこうせいということは一回も言ったことはありません。丁

度バブルの前でしたから会社もすつかり順調にいきまして、休みは多くなるし、会社の人にとってみればまだまだですけれども、給料も少しは良くなるし、とにかく状況はどんどん良くなつていきました。それは全くただ単なる幸運だったのですが、父は「お前は偉いなあ、凄いなあ」ということばかり言いました。それは本当に自分が一番良く分かっています、社会の好景気のお陰と、何と言っても最大の理由は父が基盤を作ってくれたことだということとは、重々分かっているつもりです。

僕はだんだん歳をとってきて、なるほど父という人は良かったなあ、こうしてもう一遍父を味わい直しています。ではその様な僕が父から引き継いだ会社が今どんなことをやっているかと言いますと、その一つに横浜のみなどみらい21地区にある神奈川県警友会が所有する「けいゆう病院」があります。

良い父、良い仲間

まだまだ私などは父の歩んで来た足跡から比べたら何もしていないに等しいような気がしません。父は、自分で望むか望まないかに関わらず、色々な災害、人生や会社の危機、色々なものにぶつかってきたわけですが、僕自身はそういう点ではまだこれといった事件にも遭遇していません。まだまだ人間としての深みに欠けるだろうと思います。しかしこれも僕の境遇で仕方がないので、この中で頑張つてやっつけていこうと思つています。父は僕の人生の先輩として人生を楽しく豊かなものとして生きる事を実践しましたし、そこから僕はいろんな事を教えてもらったと思つています。僕らは大変仲の良い親子だったという事は自信を持って言えますし、お互いに楽しい仲間だったと思つています。ですから父が亡くなった時には僕の気持として、

良い父だったと思ひましたし、良い仲間だったと思ひました。うるさい事やら色々無くもなかつたけれども、人生と一緒に楽しく過ごせたことは大変幸せだったと思つています。

厳しい建築家のお話ではなくて、極めて人間的な付き合いとしての父と僕との関係についてお話をさせて頂きましたので、ご期待の向きとは多少違うものがあつたかもしれませんが、これも我々の生き方だということでご理解を頂きたいと思ひます。

今日、決して嘘のないお話をさせていたいただいたことが僕のせめてもの皆様に対する誠意だと思ひます。どうも有り難うございました。

注 平成九年七月十日、東京建築士会における伊藤一章氏の講演、「建築家再発見／子が伝える『わが父』より一部を割愛して掲載させて頂きました。（文責・編集部）